

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)  
 大学院生研究  
 2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	史学専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科・史学専攻・四年		安田 千恵美 印				
指導教員	所属・職名		氏名				
	文学部・教授		後藤 雅知 印				
自然・人文・社会の別	自然	人文	社会	個人・共同の別	個人	共同	名
研究課題名	近世女性をめぐる書物・メディアの「教育」的機能について						
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科史学専攻 博士課程後期課程四年		安田千恵美				
研究期間	2013 年度						
研究経費	(支出金額)	197	千円	/	(採択金額)	200	千円

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の概要は、近世女性をめぐる情報空間の変容と多様性に着目し、近世中後期に成長・成熟する出版業が生み出す情報のうち、〈女性向け〉とされた商品を素材に、他情報発信メディアとの相関関係を踏まえながら、女性に向けて如何なる情報が選択され、制作され、消費されたのか、を明らかにすることである。

また、それら商品が〈教育的〉なものとして認識されていたのか、という視点から一般に「女訓書」と呼ばれることの多い女性向け書物の内実と出板元である書肆の意識を検討する。更に〈教育〉という概念が広まる近代以降の変化を見据えて、近世女向け書物の特質を考察する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 近世女性 } { 書物出版 } { 教育 }

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

2013 年度の研究計画において、研究代表者は①女書概念の整理、②女書出板・販売側である書肆の個別事例研究、③女書の盛行と派生作品、④女書の近世近代における連続性／非連続性、⑤史料収集、⑥女子用往来を多く所蔵する酒田市立図書館での史料調査、の 6 項目を具体的な研究課題として挙げた。まず、この 6 項目に沿って本年度の研究活動を概観した上で、その成果を述べたい。

## ① 女書概念の整理

近世で出版された書物は、本屋仲間での出板記録帳である「書籍目録」という史料には、項目立てて書名が列記されている。この史料には書物中心で、草紙が含まれないなど問題点もあるが、まずは元禄五(一六九二)年以降の「書籍目録」の内、女向け書物である「女書」という項目の悉皆調査を行った。結果として、「女書」は 17 世紀には中国舶来の『女誠』を代表とする、所謂「女訓書」が中心であり、18 世紀に入ると「女書并手本類」として女筆及び歌書の割合が増加し「女書」の内部に各ジャンルが存在し内容別に細分化されるようになる。つまり、「女書」は従来の研究用語で言うところの「女訓書」でもなく「女子用往来」でもない、近世出板メディアによる分類概念である。

しかし、19 世紀以降の「女書」＝女性向け書物概念がどのように変化していくかについては、書籍目録が部立ではなく、いろは順になるという形式の変化から追うことが出来なかった。従って今後は各書肆個別の出板事情を具体的に窺っていくことが必要になった。 →②の検討へ

## ② 女書出版・販売側である書肆の個別事例研究

研究代表者の主たるテーマである「女今川」を多く出板した書肆として、大坂・柏原屋清右衛門家、京都・菊屋七郎兵衛家に着目し、本屋において「女書」がいかなる位置を占めていたか／作者の比定を行った。SFR により大坂書肆の基本史料である『大坂本屋仲間記録』全巻を購入し、史料内から柏原屋の代替わり時期を措定した。柏原屋の出版の中で女書は常に 17% 程度を占めており、常に新板で出版しているが、経営基盤の揺らいだ柏清 C (おそらく三代目) の経営時期には再板を繰り返している点からも、安価に制作出来、利益の見込める商品であったことがわかる。また、菊屋では、「躰」を題簽に入れるという販売戦略と、古典知を付載記事に多く盛り込むという手法で、個性ある「女書」を出板した。書肆が特徴ある「女書」を発信することから近世女性向の知を広げたことが想定される。その京都大坂における具体的な出板事情を明らかにした。

## ③ 女書の盛行と派生作品

近世の〈教育的配慮〉・〈教訓性〉とは如何なるものであるのか、ということを考える素材として、従来の書物からではなく、『女今川教訓双六』なる遊戯具を購入、検討した。本双六は、書物である「女今川」のヴァリエーションの一つであるが、「女今川」条目にそれぞれ絵を付しているところから、条目内容の解釈に迫ることが可能である。身近な例を取りながら、意味を伝えようとする本史料は、〈教育〉とは無縁の遊戯具の〈教育性〉を如何に捉えるか、という問題を提起している。また、近世人の解釈を知る素材ともなる。例えば「父母の深き恩を忘れ、孝の道疎かならざる事」という条目には、駆け落ちする男女の図が付されており、興味深い。このような諧謔を含んだ表現の〈非教育的〉なメディアの存在と書物知のリンクが近世の特徴であるとする立場に立っている。これらの存在が近代化の中で重要視されなくなる過程の検討が今後の課題である。

## 研究成果の概要 つづき

## ④ 女書の近世近代における連続性／非連続性

研究史上、最も層の厚い「女大学」を事例に、なぜ近代において「女今川」が消滅し、「女大学」ばかりが有名になったのか、福沢諭吉の評論を契機に「女大学」の時代性を検討した。「女大学」が最も大衆化する時期は昭和初期～20年であり、その影響をうけて戦後の研究も「女大学」優位のまま行われていたことの影響について指摘した。また、「女大学」言説の検討から、近世における女性向け書物の性格と知の内容と、近代の女子教育論の〈有用性〉という視点の違いが、「女今川」消滅の要因であったという仮説を導き出した。

## ⑤ 史料収集

本研究で主に扱う史料は、女子用往来や女性向け書物・出版物・刷り物などの印刷物である。特に女子用往来は、刊行数も多く女子用往来物は多種多様なものが存在しておりその数は1200種とも言われている。このような膨大な史料群は、現在も多くが古書店や古本市場などで盛んに売買されている。総体がやや茫漠とした状態であるが、目録にないものもしばしば出てくるため、自らが蒐集者でなければ、事実上できない研究分野である。中心テーマである「女今川」関連史料を本助成により13冊購入した。「女今川」は凡そ300種刊行されたとするが、その全体像を把握するための必要な作業である。

## ⑥ 酒田市立図書館での史料調査

本 SRF の旅費支給を受け、2013年11月2日～4日まで、山形県酒田市立図書館光丘文庫の調査を行った。調査を通じ、大変珍しい『女今川若葉松』をはじめとする女子用往来物39点、写本類8点、その他女書を11点の計60点を閲覧、適宜撮影を行った。また、市内にある本間家旧邸を訪れ、光丘文庫蔵書を集めた本間家についてフィールドワークを行った。本間家蔵書の中では、女書の比率は決して高いとは言えないが、「女大学」を多く蔵本している点に特徴があり、書込のあるものもあった。他家の事例研究を待たなければならないが、武士身分となった本間家では「女大学」という格の高い書物が求められたのではないだろうか。今後の読者層研究の一助となるだろう身分と蔵書傾向について成果を得た。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

#### 1. 論文

安田千恵美「「女大学」言説の変遷とその評価―「女大学」研究をめぐって―」(荒野泰典編著『近世日本の対外関係と言説』、溪水社、2014年刊行予定、頁未確定)。

#### 4. その他

近世史の会例会報告 (2013年9月7日)  
「柏原屋清右衛門と菊屋七郎兵衛の女書出板」

以上。